



中高生とともに差別と闘う

「これは、命を守る教育」

吉成タダシ



正しく知り、正しく行動

「そして二十五歳の時、三年付き合っていた彼氏と結婚する約束をしました。彼氏は同郷の人です。でも地区出身ではない人でした。すぐに彼の母親から電話がかかってきました。内容は、私が地区の人間だから結婚は賛成できないというものでした。私は、「きたか」と思いました。これが結婚差別なんだと。ここでも私は対話を避けようとしてしまいました。

「いいよ。別に。他のいい人を探したら？」

精一杯の強がりでした。しかし、彼氏は強かった。「そんなの関係ない。同じ人間だ。親が間違っている」と。心強かった。本当にこの人についていこうと心の底から思いました。彼氏は何週間もかけて両親を説得し、結婚に賛成してくれるまでになりました。そして今では義理の両親も優しく、本当の娘のように思っていると言ってくれます」

人を本当に好きになったことのある人なら分かるはずです。

「いいよ。別に。他のいい人を探したら？」

こう言わざるを得ない悔しさ。本当は言いたくない、偽りの言葉を吐き出すことの苦しさ。胸を掻きむしりたいくらい悲しさ。声に出せない深い深い心の叫び。

部落差別に限らずとも、やむにやまれぬ理由で別離せざるを得ないこともあるでしょう。しかし、本人にはまったく責任のないことを理由に

別れざるを得ない心情たるや、如何ばかりでしょう。

一方で、正しさを貫こうとする彼に、これまで取り組まれてきた同和教育の可能性を感じます。長年にわたり全国各地で、「子どもたちの幸せのために」と、自分のことは後回しにし、我が寿命を削りながら、部落差別解消に命を懸けてこられた先人の成果が結ばれたケースがあることも、ぜひ知っていただきたいと思っています。

ただ、十年ほど前の結婚差別のケースではありますが、この十年で部落差別による結婚差別がすべてなくなったかといえば、どうでしょう。私自身、これ以降も厳しい現実を耳にしてきたことも事実です。部落問題や人権問題にあまり意欲的でない学校の先生を目の当たりにしてきたことも事実です。やはり、正しいことを知り、行動できる人権教育をまだまだ推し進める必要があるのではないのでしょうか。

これは、命を守る教育

「今まで出会った人たちには、とても感謝しています。いい人もたくさんいたし、私にとつてそうじゃない人もいたけれど、どの人も尊敬するところがいっぱいあって、今まで私を支えてくれる人もたくさんいました。そして、私も人を支えられる人間になりました。でも思います。私は逃げたばかりだったのかなあ？ 極端かもしれないけど、先生、私は自殺しなかったよ。大丈夫だった。

あの学年全体の人権学習があったから。あの時の仲間がいたから」

胸にナイフがグサッと刺さった気がしました。自分の胸に刺さったナイフの刃の鈍い色ははっきりと見えた気がしました。

「自殺しなかったということは、自殺を考えたことがあったということじゃないか！」

同和教育は命を守る教育と言われてきました。それは、人権教育に変わっても同じことだと思います。ですがそれは、身近な問題として差し迫って初めて実感として感じられることのようにも思います。でも、実感として感じられるようでは遅いですよね。だからやはり、「ヒトゴトからワガコトへ」と変わっていく日常的な人権学習の取組が必要なのです。

ある年、中学三年生を受け持っていた教室に、大きくこんな貼り紙をしたことを思い出しました。

「ときには逃げる
ときには隠れる
ときには隠れろ

どうしてもかわせなければ闘え！
一人で無理ならみんなで闘え！！
そのときの私なりの、子どもたちに贈りたかったメッセージだったのだと思います。

どう闘うか

バカ正直に真正面から正攻法で闘うことはかりを説いてきた時期もありました。それがダメだというのがありません。ただ、子どもたちのしなやかに立ち回ったり、仲間をう

まく抱き込んだりしていく姿を見て、「直球勝負だけにこだわらなくてもいいんじゃないか」と思うようになっていったのです。

直球勝負ばかりしていると、やはり打たれてしまい、勝負には負けてしまいます。ではなくて、カーブやシュートやツーシーム、ボール球になるフォークやフォアボール、たまには打たせながら、あの手の手の多様な攻め方をして、結果的に自分の得意な決め球で勝負できればいいんじゃないかと思うのです。そういう柔軟性もないと、攻め手を失い、自分自身を追い詰め、自暴自棄になり、自ら命を絶ってしまったのと同じ限りません。長い人生の中で逃げる時があってもいい。隠れるときがあってもいいと思うのです。

また、一人で抱え込むのではなく、人を頼ってもいい。絶対的エースは頼りがいがありますが、一人でできることには限界があります。相手によつて先発、中継ぎ、抑えと、頼って交代できる仲間の存在も大切なものです。そんな頼もしい仲間を、今のうちにしっかりとつくっておいてほしい。自分のなかにいるんな攻め手を持ち、余裕をもつて、「遊び」のような感覚をもちながら、豊かな人生を仲間と共に歩んでいってほしい。そんな切実な思いを、卒業を前にした子どもたちに伝えたかったのだと思うのです。

(次回「ふるさとはどこですか」)